

# 思惟造のショート ショート集

虹岡 思惟造

第1話「ハッピーバースデー」  
第2話「不老長寿の研究」第3話  
「三つの願いPart 1」第4  
話「三つの願いPart 2」第5  
話「ループサブウェイ」

## 第一話 ハッピーバースデー

---

その日も帰宅したのは、深夜の2時ごろであった。このところ午前様が続いている。仕事が忙しいのだ。土曜日曜も出社することが珍しくない。大変ではあるが、仕事に不満はなかった。むしろやりがいがあると思っている。ベンチャー企業である勤務先の会社は今が伸び盛りで、忙しいのは邦夫一人でなく、社長以下全社員同じであった。

自宅のマンションの扉をそっと開ける。妻の律子が寝ている洋間を覗いてみる。軽やかな寝息が聞こえる。ぐっすり寝ているようだ。律子はある建築設計事務所に勤めている。子供はいないので、DINKS（ダブルインカム・ノーキッズ）ということになる。住宅ローンが残っているが、経済的には余裕があった。

『子供がいれば、その寝顔を見て、にっこり笑う場面なのだが』

そんな思いを抱きながら」自分の寝室にしている部屋に行き、背広をぬぎパジャマに着替えた。律子とは入社時間、退社時間が異なっており、いわゆるすれ違い夫婦である。寝室も別であるから、家庭内別居のようなものだが、結婚してすでに15年になる。これまで喧嘩らしい喧嘩もせずにやってきた。律子もそんな生活に満足しているようであった。邦夫は充実感と心地よい疲労感の中で眠りに落ちた。

邦夫が目覚めたのは翌朝の九時過ぎであった。律子はすでに会社に出かけている時間である。リビングルームの食卓の上には、簡単な朝食の用意がしてある。いつもの通りである。邦夫はテレビ兼用のパソコンの電源を入れた。これも毎朝の日課である。スタートメニューが電子掲示板にセットされているので、パソコンの立ち上がりと同時に、律子の伝言を見ることが出来る。夫婦の間のコミュニケーションは専ら、パソコンの電子掲示板でなされていた。邦夫はこんな夫婦のあり方をあじけないとは思っていなかった。むしろ現代にマッチした新しい生活スタイルと前向きに受け入れていた。

パソコンの立ち上がりを告げるチャイムに続いて、Happy Birthday to Youのメロディが流れ出した。画面に“誕生日おめでとう”という大きな文字が浮かびあがる。今日は邦夫の誕生日だったのだ。ここ数年は互いに忙しいこともあって、夫婦間で誕生日のお祝いをしたことがなかった。律子がこんな気の利いたことをしてくれるとは、思いもしなかっただけに嬉しかった。画面には小さな文字でメッセージがあり、冷蔵庫にお祝いのケーキがあると記されていた。冷蔵庫を開けると、小さいが誕生祝い用のケーキがあり、その傍らにグリーティング・カードが添えられていた。

『Happy Birthday dear KUNIO To Veranda』

書かれた文字を見て、一瞬何のことかと考え込んだが、ベランダに行ってお覧なさいという意味であろうと見当をつけた。邦夫は益々楽しくなってきた。律子は中々手の込んだことをしている。それもゲーム感覚で事を進めようとしているらしい。

『そう言えば、今、会社で開発中のゲームのことを、掲示板に書き込んでおいたので、それを見た律子がゲーム風の演出をしているのだろう』

邦夫はわくわくしながらリビングルームのガラス戸を引き開け、ベランダに出た。南向きのベランダには陽が燦燦と降り注ぎ、鉢植えの観葉植物の緑が美しい。ベランダの隅にピンクのリボンのついた、蘭の鉢植えが置いてある。花に興味の無い邦夫はその蘭が何と言う種類か分からぬが高価そうな代物であった。ピンクのリボンには、またしてもカードが添えられている。

『PRESENT FOR YOU VERANDA OUTSIDE』

”あなたへのプレゼントは、ベランダの外側”だとすぐに察して、ベランダの手摺から身を乗り出すようにして下を見た。邦夫の部屋は8階にある。高所恐怖症の邦夫にとって、あまりやりたくない行為であるが、ゲームにはスリルが付き物だと自分に言い聞かせ我慢した。

あった。赤いリボンが飾られた小さな箱が邦夫の眼下の空中に浮遊している。いや浮遊していると見えたのは間違いで、その箱は細い紐でぶら下げられていたのだ。あの箱の中に、本命のプレゼントが入っているのであろう。高所恐怖症なので下をまともに見られない。それに早く箱を開けてみたいという気持ちから、よく確かめないままにベランダの手摺に結ばれた紐を引揚げようとした。ところが何かにつかえているらしく、引揚げることが出来ない。

邦夫は仕方なく、もう一度身を乗り出して、下を見た。胃のあたりがぞくぞくする。箱を引揚げられない訳が分かった。紐の途中がガムテープで壁面に固定されているのだ。多分、箱が風で揺れて落下するのを防ぐためにこんなことをしたのだろう。もちろん手を伸ばせば届く位置にガムテープは貼られている。高所恐怖症でない人にとって、手を伸ばしてガムテープをはがすことは訳も無いことであったが、邦夫にとっては大変である。邦夫は自分が高所恐怖症であることを律子に隠していた事を後悔した。夫婦の仲で、隠し事はやはりよくない。しかしこうなれば思い切ってガムテープを剥がすより仕方ない。覚悟を決めた邦夫は身を乗り出し、手を伸ばした。

次の瞬間、邦夫はベランダから落下していた。邦夫自身は何がなんだか分からないまま、吹き上げてくる風圧を全身で感じ、目は幾何学模様のような映像が高速でスクロールしているのを知覚していた。そして黄金色の光が炸裂した。邦夫は薄れ行く意識の中で『ゲームは終わっていない、コンティニューだ。コンティニューのボタンをクリックしなければ...』と念じていた。

音が聞こえる。光は無い。

『ここはどこだろう、死んだのか。それとも...』

音は人の話し声のようである。聞き覚えのあるあの声、そうだ、あれは律子の声だ。目を開け身体を動かそうとした。しかし思うようにならない。というより自分の肉体の存在感がまるでないのだ。やはり自分は死んで、霊的な存在になったのだと邦夫は思った。

「こんなことになるなんて思いもしなかったわ」

律子の声である。邦夫の気持ちが落ち着いてきたせいか、話の内容を聞き取ることが出来るようになったようである。

「仕方ないさ、人間がやることだ。パーフェクトにはいかないさ」

男の声だ。親族や友人の顔をいろいろ思い浮かべたが、該当するような人物はいなかった。

「でも植物状態のままこの先ずっと生き続けられたらたまらないわ」

「ふむ、それもそうだ。完璧なる殺人計画だと思ったが...それにしてもあんたの亭主はしぶとい」

亭主とは私のことではないかと、邦夫は思い当たる。

「あの人がゲームの開発で忙しいとかいうから、あんな殺し方を思いついたんだけど、結果は最悪」

邦夫は混乱した。自分はどうなったのだろう。激しく動揺しながらも律子の言った言葉を必死に考えた。

そして得た結論は、自分は律子に殺されようとしたが、一命を取り止め、植物状態で生かされているということだった。そう言えば、ベランダから身を乗り出してガムテープを剥がそうとした時、誰かに両足をすくわれたような感触が記憶のどこかにある。足をすくって転落させたのは律子だったのか。

「もう一度殺せばいいさ」

抑揚の無い陰気な声である。邦夫はその声の主を不意に思い出した。律子の勤務する建築設計事務所の所長である。邦夫は律子と所長の関係に思い至り愕然とした。

「そこにある装置がちょっとの間、休止すりゃあ、こんどは間違いなくあの世行きだ」

「そりゃそうでしょうでけど、病院が不審を抱けば、警察に通報するわ。警察にあれこれ聞かれるのは、この前でもうこりごりよ」

これらのやりとりを聞いた邦夫は怒り、そして絶望した。これ以上、律子達の会話を聞くに耐えられなかった。邦夫はこのまま死んでしまいたいと強く念じた。

「あら、何か鳴っているわ。生命維持装置の警報音じゃない」

「ああ、そうだ。やや！容態が急変したぞ、心拍グラフが横一線に流れている。心臓が止まったんだ」

邦夫は、暗黒の中から光り輝くものが次第に大きくなっていくのを眺めていた。やがてそれは、七色のオーロラのようになって視界を覆った。そして甘美な音楽が流れてきた。『ゲームは終わったんだ、こんどこそ本当にエンディングを迎えたのだ』と邦夫は悟った。その途端、不思議なことに怒りも絶望感も、潮が引くように無くなり、心は安らぎに満ちた。すべてが、ゆっくりとフェイド・アウトして行く。

## 第二話 不老長寿の研究

---

「やっと完成したぞ、どうやら死ぬ前に間に合ったようだ。」

R博士が、すべてを犠牲にしてこの30年間没頭してきた不老長寿の研究が、今完成したのである。R博士の考案した不老長寿の方法は自分の全ての記憶を、健康で若い人の脳にそっくり移し替えるというものであり、本当の意味の不老長寿とは少し違う。しかし己の魂を、老いた肉体から若い肉体に乗り替えることを繰り返すことで、永遠の若さと命を手に入れることができるのであるから、不老長寿には違いなかった。

R博士は、まず第一に自分が、その装置を使って若返ろうとした。本来なら動物実験などを繰り返し、その安全を確かめた上で、その後人間によるテストというのが常識的な手順である。しかし博士は高血圧で心臓が悪いときでおり、つい一週間程前に発作で倒れ、あわやあの世行きとなるところだったのだので、一刻も早く若い肉体に乗り移りたかったのだ。そこで博士は助手のPを呼んで告げた。

「おまえも知ってのとうり、私は発作で明日にも死んでしまうかもしれない。そうなれば、この偉大なる研究は全て水泡に帰してしまうじゃろう。なぜなら、あまりにも完成を急いだので、この研究にかんする記録をとっておらんのだ。そこでじゃ．．．」

博士はそこで一息いれると、助手の表情をうかがった。Pは真剣な面持ちで博士の話聞いていたようだった。博士は話を続けた。

「私の持っている記憶の全てを、おまえに譲り渡したいと思うがどうじゃろう。」

この博士の言は『おまえの、若い肉体を私に寄せ』ということに他ならない。しかしあからさまにそんなことを言えば、誰も承知しないであろう。博士は必死に考えた挙げ句、免許皆伝の極意を弟子に授けるような表現にしたのである。P助手は、博士の研究を全面的に援助してくれているZ財団から最近、派遣されてきた青年であり、均整のとれた若々しい肉体の持ち主であった。そして言いつけられたことは従順に、しかも正確にやり遂げるといふ非常に有能な助手ぶりを発揮していた。

「博士の研究の為なら、なんでもせよというのがZ財団の指示です。博士のおっしゃる通りにいたします。」

P助手は、博士の言葉の意味を深く考えることなく、あっさりと博士の申し出を受け入れた。

博士とP助手は、二つのベットに横になり互いの頭を何本ものコードで繋ぎあわせた。そして博士が、フルオートのボタンを押すと、装置は勝手に動き出して記憶移転作業を開始しだした。

けたたましい警報の音と、割れるような頭の痛みで博士は目を覚ました。警報装置を見ると、ゲージは入力超過の状態にあることを示していた。博士は電源を切ろうとしたが、身体が自由がきかずゲージが危険ゾーンに達して、ようやく装置は自動停止した。そのとたん、警報が鳴り止み、頭の痛みは薄らいだ。頭のコードを取り外して、P助手のベットに近寄った。P助手は先ほど

からピクリともしない。心配になって顔を覗き込んだ。何か焦げるような匂いがする。と思ううちに、P助手の頭から煙が立ち上り始めた。驚いた博士は、あわててP助手の頭についているコードを引き抜いた。その拍子に頭髪がズルッと全部抜けた。

「ぎゃー！！」

博士は思わず、悲鳴をあげ目を閉じた。数秒そうしていただろうか、博士は恐る恐る目を開け、P助手の頭を見た。頭がブスブスと燃えている。また目を閉じてしまいたくなくなったが、じっとこらえ科学者の冷静な観察に徹しようとした。すると、焼け爛れた頭皮の奥に歯車状の金属や集積回路のようなものがぎっしり詰まっているのが見えた。博士はPがロボットであることを理解した。博士は30年間、この研究にのみ没頭していたので知らなかったのだが、補助的な仕事、即ち秘書とか助手はアンドロイドにまかせるというのが、世の趨勢だったのである。PはZ財団が博士の為に特に精巧に製造させた最新鋭のアンドロイドだったのである。しかしいくら最新鋭でも電子頭脳が人間の脳の記憶容量を全て、入力できるものではない。記憶移転装置が警報を発したのは当然であり、無理をして入力を続けた結果、Pの電子頭脳が燃え出したのであった。

博士は呆然自失の態であった。なぜなら博士の記憶のなかに、不老長寿に関するものは全て失われていたからである。記憶の転移は重要なものから順次、相手の脳に移すようにプログラミングしてあったのだ。博士にとって最も重要なものは不老長寿の研究に他ならなかったのだ、まず第一にこの部分がPの電子頭脳にインプットされたのだ。

深い失望感が博士を襲い、それは発作を引き起こした。博士の残された記憶が誰にも転移されること無く、急速に失われていった。

### 第三話 三つの願い Part 1

危ないところを助けてくれた S 夫妻に対しペタン星人と名乗るその宇宙人はお礼に、三つの願いを叶えてあげると申し出た。ある宗教の熱心な信者である夫妻は、相談のうへ、人類すべての為に、この願いを活かすことにした。その志は誠に崇高なものと言いたいが、実際は人類を救済したとして救世主におさまり、自分たちの宗教を全世界に広めたいという野望が根底にあったのだ。

夫は人類に「自由」と「平等」と「平和」の三つがもたらされることを願うべきだと考えた。妻は人類から「病気」と「餓え」と「貧困」が無くなることを願うべきだと考えた。そして互いに自分の考えの正当性を主張し、相手の考えを非難した。夫の言い分は「病気」や「餓え」や「貧困」が無くなるに越したことはないが、それらが無くなっても人間は真の幸せを得ることは出来ない。本当の幸せは「自由」「平等」「平和」な社会によって初めてもたらされるのだというものであった。一方、妻の言い分は、世の中が本当に「自由」「平等」「平和」になってしまったら、やりたい放題、しほうだい、悪平等に太平楽と人間を墮落させるばかりである。「病気」「餓え」「貧困」の撲滅こそ人類の悲願であるというものであった。互いの非難合戦は中傷、誹謗へとエスカレートしていった。

「病気や餓えや貧困が無くなってしまえば、人類は増加、また増加。地球はじきに人であふれてしまう。そうなりゃ、人類の破滅だ。だから即ち、そういう訳で早い話が病気も餓えも貧困も人類にとって必要なのだ。神が我らに与えたもうものなのだ。それも弁えず、無くしてしまえなどは、もっての外、神をも恐れぬ不屈きもの、えーい頭が高い下がりおろう。」

夫が大声で見栄をきれば、妻がすかさず反撃する。

「自由で平等で平和な社会になったらどうなると思うのよ。私たち救世主として崇めてもらえなくなっちゃうじゃないの。それどころか、そんな社会になったら宗教そのものがいらなくなってしまおうわよ。そんなこと神がお許しになると思うの。あー、貴方っていう人はなんて大それたことを考えるのかしら。神をも恐れぬその所業、悪魔に食われて地獄に落ちるは必定じゃー！！」

妻は口から泡を飛ばして目を剥いている。神懸かりの状態である。もうこうなると互いに意地になっているから、頑として自分の主張を譲らない。しばらく非難の応酬が続いたが、妻のあまりの強情さにうんざりした夫は、「あー、妻というものがもう少し夫に従順であってくればよいのだがなあ。」と溜め息まじりに言えば、極度の興奮状態から覚めて今は虚脱状態にある妻は、「夫はもっと素直に妻のいうことを聞くべきよ。そんな世の中にならないかしら。」と力なくつぶやいた。

「アノー、モウシワケアリマセンガ. . .」

部屋の隅の椅子に座って三つの願いが決まるのをじっと待っていた宇宙人が痺れを切らして二人に声をかけた。

「ワタシ、モウスグ、コキョウノペタンセイニカエラネバナリマセン。サッキノフタツノネガイ、モウカナエマシタ。ダカラモウヒトツノネガイ、ハヤクキメテホシイノデス。」

「さっきの二つの願いだって！！」

二人は同時に声をあげた。

「アナタハ、ツマガジュウジュンニナルコトヲ。オクサンハ、オットガツマノイケンヲキクコトヲネガイマシタ。」

「そんな願いはした覚えはないぞ。」

「そんなこと嘘よ。」

夫と妻は口々に叫んだ。

「ウチュウジン、ウソツカナイ。」

「それじゃ、その願いは取り消してくれ。」

「ステニカナエテシマッタコト、カエラレナイ。フクスイボンニカエラズ、コレ、ウチュウノフヘンテキルール。」

まりの事態に動転した二人は、またもや責任を相手になすりつけようと、中傷、誹謗、罵詈雑言の限りを浴びせ掛けた。そのうち妻が一向に従順になっていないことに気付いた夫が宇宙人に向かって言った。

「私の願いは、全然叶えられていないじゃないか。やはり宇宙人は嘘吐きだ。」

妻も夫がちっとも自分の意見を聞いてくれないので

「ほんとにそうよ、私の願いだってかなえてくれていないじゃないの。」と宇宙人に噛み付いた。

「フタリノネガイ、タシカニカナエタヨ。タガイニ、アイテガ、イウコトキクヨウニネ。デモコレ、プラストマイナス、イコールゼロ。スナワチ、チャラッテコトネ。」

「そんなのペテンだあー。」

「ノー、ワタシ、ペタンジン。」

とにかくすべては後の祭りと悟った二人は、まだ一つの願いが残っていると、互いに慰めあうも、口からでるのは愚痴というもの。

「人類にとって、大事な願いを二つも失ってしまうなんて、あー、私って、なんて馬鹿なんでしょう。自分がつくづく嫌になったわ。」

「まったくだ。恥ずかしい限りだ。神に対しても、人類に対しても顔向け出来ないよ。穴があったらはいりたいものだ。」

夫の言葉に、頷く妻のしぐさを見て、宇宙人はつぶやいた。

「ヤレヤレ、ミツツメノネガイ、ヤットキマッタネ。ソレニシテモ、コンドノネガイ、フタリノイケンガピッタンコデヨカッタヨ。サテソレデハ、ネガイヲカナエテヤルトスルカ。」



F氏は、ひよんなことから、宇宙人を助け、そのお礼として、三つの願いが叶えられることになった。どんな願いにするかは、慎重の上にも慎重を期さなければとF氏は思った。こんな機会は二度と無いだろうし、ソーセージを鼻からぶらさげるような愚かなことは絶対に避けるべきであった。しかしあまりゆっくりと考えている時間はなかった。宇宙人は明日、故郷の星に帰ることになっていたのである。

そんな訳で、夜の更けるまで願い事の検討を続けていたが、老齢のうえに肝臓を患っており体力を消耗して、考える気力も失せてしまいそうであった。そこで、とりあえず第一の願いとして、若々しい健康な肉体を叶えてもらうことにした。

たちまちにして、みずみずしい活力を得たF氏は、その体力にもものを言わせて、あと二つの願いをエネルギーに考えだした。だがどれも、満足のゆくものは思い浮かばなかった。それというのも、身体は若く健康でも、肝心の頭脳の方がごく平凡なものに過ぎなかったからである。最善の願い事を思い付くためには、優れた頭脳を持つにかぎると悟ったF氏は、第二の願いとして、彼の宇宙人と同レベルの頭脳を授けて貰うことにした。

その願いが叶えられるや、F氏の容貌は一変し、その瞳は深い湖のような光をたたえ、威厳と慈悲に満ちた仏像のような表情になった。若く健康な肉体と、宇宙最高レベルの頭脳をもって、第三の願いを何にするか考えようというのである。F氏は、しばし瞑想した。するとごく自然に宇宙普遍の真理を悟ることができた。それは素晴らしい喜びをF氏にもたらしたが、一方では、地球の置かれた悲惨な状況をも知ることとなった。弱肉強食の食物連鎖は地球だけの残酷な仕組みであり、他の宇宙の生命体は、全てが平和的で優しさに満ちていたのだ。地球が地獄そのものであることを認識したF氏は、地球上の生物がなんとも憐れで、胸が締め付けられる思いであった。そこでF氏は、地球上の生きとし生けるものすべての魂の救済を願った。

すると、たちまちF氏の姿はかき消えて、光り輝くガス状の物質になって宙に拡散した。

## 第五話 ループサブウェイ

地下鉄の車内が急に明るくなった。丸の内線の淡路町とお茶の水の間にある地上走行部分に出たのであった。吊革につかまりながら単行本を読んでいた浩平が、車窓に目を向けると神田川の青黒い川面が見えた。先程も見たように感じたのだが、この時はあまり気にしないで、また本に目を戻した。電車はお茶の水のホームに着いた。通勤時間帯であるが池袋方面への車内は空いており、乗客の乗降はスムーズに終わり電車はスタートした。

しばらくすると、また車内が明るくなった。目を上げて外を見ると神田川があり、その向こうに特徴のある聖橋のアーチ状の橋げたがあった。

「確かさっき見たはずだが・・・」

浩平は周囲を見渡したが騒ぎ立てる人も無く、いつもの朝の通勤風景である。その間にも電車はトンネルに入り徐々にスピードを緩めている。車内放送がお茶の水に到着することを告げた。浩平は混乱した。電車はそんな浩平のことにはお構いなしにホームに停止した。そこは間違いなくお茶の水駅であった。更に混乱し、冷や汗が出て動悸がしてきた。これはなにかの勘違いであると自分に言い聞かせた。

ところがそれは勘違いではなかったのである。浩平の乗るその電車は、お茶の水駅を出発したが、次に停車した駅はまたもやお茶の水駅だったのだ。そんなことが何回も続き、電車は決して本郷三丁目駅に進まないのであった。

当初はあまりのことに動転していたが、同じ繰返しに慣れて、少し落ち着きを取り戻した。車内の人達は何事もないように駅で乗り降りし、座席の人は居眠りなどしているように思えたが、良く観察してみるとお茶の水駅で降りたはずの人が、いつのまにか車内に戻っているのである。逆にお茶の水駅から乗り込んできた人達は、ある時点でふっと居なくなってしまうのだ。

浩平は不安な気持ちを持って余しながらも、更に状況を正確に把握するよう努めた。その結果、お茶の水駅をスタートしてしばらくすると、車内の様子が一瞬にして変わり、お茶の水から乗ってきた人がいなくなって、その代りにお茶の水で降りた人が出現することなどが解った。乗り降りしない他の人達の動作も、その時同時にリセットされたように変わることから、その瞬間に時間が数分逆戻りするのだということを浩平はやっと理解した。そしてそれはループ状になって行っては戻りの繰返しで、決してそれ以上、前に進まないのだ。“無限地獄”そんな言葉がふと脳裏をよぎり浩平は悪寒にふるえた。

その時になって初めて、他の人がどう思っているのだろうかと思い付いた。そこで隣の吊革につかまっているサラリーマン風の男に声を掛けてみた。返答は無い。他の何人かに声を掛けたが同様であった。どうやら他の人には浩平の存在が眼中にないようであった。

浩平は無限地獄の中であって孤独であった。追いつめられた気持ちになった浩平はお茶の水駅で思い切って降りてみる事を決心した。お茶の水駅で降りたはずの人が、また地下鉄の車内に引き戻されていることを考えると、自分も同じようになるとの嫌な予感もあったが、何もせずじっとしていれば無限地獄が続くばかりである。

お茶の水駅のホームに降りた。しばらくそこに立ち止まって電車が走り去るのを眺めていた。

ホームのアナウンスが早くも次の電車がくることを告げていた。次の電車が来るのを待ってみるか一瞬思いを巡らしたが、ここからなるべく離れた方が良いという気持ちになって改札口に向かい駆け出した。

改札を抜けて階段を駆け上がり地上に出た。路上は信号待ちの人達であふれていた。信号が青に変わり人々が歩き始めた。浩平はふと思いついて、横断歩道を向こうから歩いてくる若い学生風の男に声を掛けた。

「あのすいません。いま何時ですか？」

相手はちょっと訝しげな顔をして浩平のことを眺めたがそれでも

「8時40分ですね」

と腕時計に目をやって答えてくれた。

「ありがとうございます」

深々とお辞儀をして礼を言った。相手と意志が通じた事に安堵したのだ。電車を降りてから、かれこれ5分は経過したことだろう。何事も無く時間は進行しているようだ。歩みを止め大きく深呼吸した。初夏の日差しが眩しく、風が爽やかであった。